

『ザ・ビートルズ レット・イット・ビー』

1970年／イギリス／マイケル・リンゼイ＝ホッグ監督作品

彼らの魅力と時代の空気を映し出す 解散間際のドキュメンタリー

会員 西川 達也 (61期)

198X年、某県庁所在地を歩いていた中学3年生か高校1年生の私は、たまたま（たぶん）あるデパートで「ザ・ビートルズ展」が開催されているのを見つけた。

展示されていたのは、メンバーが使っていたギターや衣装、曲のアイディアを書き留めた直筆のメモなどで、ビートルズを聴き始めてまだ2、3年であった私は、大いに興奮して展示に入った。

その会場の一画に置かれたテレビ画面で、さりげなく流されていたのが、この映画「レット・イット・ビー」であった。私は、画面に釘付けになり、繰り返し再生される映像を延々と立ったまま見続けた。

「レット・イット・ビー」は、ビートルズが主演する劇場用映画としては、「ビートルズがやって来る ヤア！ヤア！ヤア！」（64年）、「ヘルプ！ 四人はアイドル」（65年）に続く3作目の作品であり、そして最後の作品である。

前2作が、一応ビートルズのメンバーが（本人役ではあるが）ストーリーに沿って演技をするアイドル映画（「ヘルプ！」はコメディ映画としても傑作！）であったのに対して、本作品は、ストーリーも何もないドキュメンタリーである。

1969年1月、数年前までアイドル映画に出ていたとは思えない、髭面に伸びきった長髪の「素の」ビートルズが、久しぶりのライブパフォーマンスに向けてスタジオでリハーサルをし、曲を練り、当時の彼らの本拠地であったアップル・ビルの屋上でコンサートを行うまでが映し出される。

本作品は、ビートルズが実質的に解散した年である1970年に劇場公開されてから、ごく一時的にビデオが販売された後は、市販ソフト化されておらず、なかなか見るこのできない幻の作品とも言われている。結果としてビートルズの解散間際を映した作品となったこ

ともあって、散々な世評が一人歩きしている。「全編でメンバー間の口論が絶えず冷たい空気が漂う」、「企画したポール・マッカートニーだけが張り切っていて、他の3人は乗り気ではない」、「演奏される楽曲がビートルズとしての水準に達していない」などなど。

しかし！である。バンドの解散が近いことを思わせる場面はあるものの、映画には彼らの魅力とその時代の空気が確実に映し出されている。

リハーサルでは笑顔が見られ、ビートルズお得意のジョークが飛び出す。ジョン・レノンとジョージ・ハリスンも熱い演奏を繰り広げ、リンゴ・スターは、黙っていてもムードメーカーであったことが伝わってくる。

そして、ラストの屋上コンサートでのジョンとポールが並び立つシーンは、陳腐な表現ではあるが、カッコイイとしか言いようがない。

荒削りな楽曲と演奏も、後にエリック・クラプトンらが傾倒したアメリカ南部の音を取り入れた、ビートルズの先進性を示すものと考えれば合点がいく。

ビルの上から聞こえてくる突然のビートルズの演奏に、ロンドンの街は騒然とする。映画は、ビル街に鳴り響く屋上コンサートの音を聞いて警察官が駆けつけ（まさにゲリラ・ライブ！）、アンプの電源を切られてもなおビートルズが演奏を続ける「ゲット・バック」で終わる。誰が企画したか、メンバーが乗り気であったかどうかなどは関係ない、この時代を象徴する名シーンである。

200X年、ロンドンの街を歩いていた私は、たまたま（本当！）この屋上コンサートが行われたビルを見つけた。街を歩いている足が震える経験はそうそうあるものではない。

ビートルズを愛する人たちが、いつでもこの映画を見られる日が来ることを願ってやまない。